みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「さわる展示」の深化と応用①：高等教育のユニバーサル化をめざして：共同研究：触文化に関する人類学的研究―博物館を活用した"手学問"理論の構築 （2012-2014）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5775

PROJECT

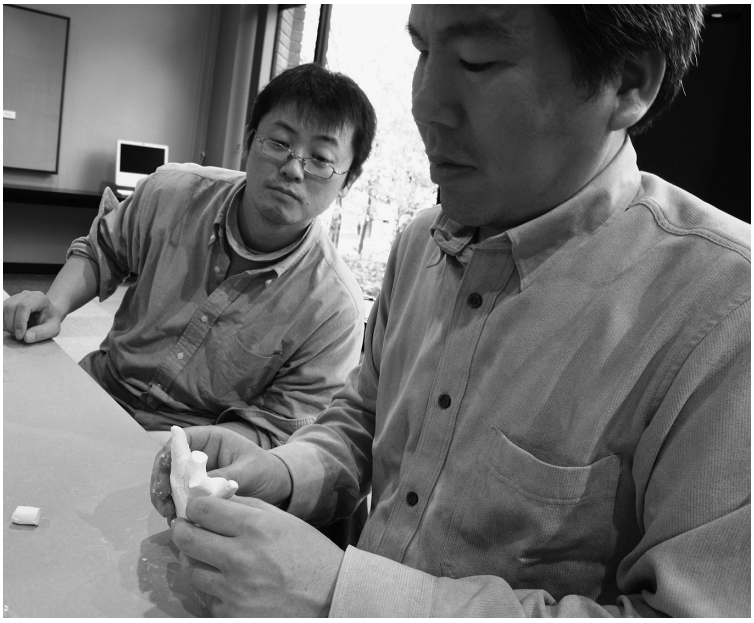
「さわる展示」の深化と応用①
――高等教育のユニバーサル化をめざして――

文
廣瀬浩二郎

共同研究 ● 触文化に関する人類学的研究――博物館を活用した“手学問”理論の構築（2012-2014）

はじめに

2009年度から2011年度までの3年間、私は科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究」を運営した。この科研プロジェクトでは「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の理論構築を意図して、全国各地の博物館・美術館で研究会とワークショップを行なった。2011年10月にはプロジェクトの成果公開を目的とするシンポジウムを国立民族学博物館（民博）で実施し、その報告書として『さわって楽しむ博物館』（青弓社、12年5月）も刊行された。本書を通じて、「さわる展示」がユニバーサル・ミュージアムを具体化するための必須要件であることを実証できたのではないかと自負している。「さわる展示」の豊富な実践事例を紹介する本書は、日本におけるユニバーサル・ミュージアム研究の進展を促すものといえるだろう。



共同研究会では参加者が実際に手を動かし、触学・触楽する機会を重視している（2013年3月2日、国際基督教大学博物館、堀江武史撮影）。

上記の科研プロジェクトの趣旨を発展的に継承する形で、2012年度から民博の共同研究「触文化に関する人類学的研究」を開始した。本共同研究には2つの目標がある。①さまざまなミュージアムの「さわる展示」の方法論を検証し、博物館を活用した“手学問”理論を練り上げる（ユニバーサル・ミュージアム概念の深化）。②高等教育、観光・まちづくりなどの他分野に「さわる展示」の発想を導入し、触文化論の普遍化を図る（ユニバーサル・ミュージアム概念の応用）。この2つの問題意識の下、文化人類学者のみならず、博物館教育・観光学の専門家、盲学校の教員、アーティストなどに広く参加を呼び掛けた。2012年度には2回の共同研究会を開催し、「触文化＝さわらなければわからない事実、さわって知る物の特徴」という切り口から「ユニバーサル」の意義にアプローチした。本稿では2012年度の研究会の内容、とくに②のテーマを敷衍し、私の個人的経験も交えつつ、大学教育のユニバーサル化について論じてみたい。

情報化の恩恵

2013年3月の研究会の会場は国際基督教大学（ICU）博物館だったので、同大学出身の2名の視覚障害者に体験発表してもらった。Tさんは1980年代後半から90年代前半にかけて、Yさんは2000年代にICUに在籍した全盲学生である。2人とも卒業後は一般企業に就職し、第一線で活躍している。両者の年齢差は20歳足らずだが、そのわずか20年の間に視覚障害者の学習環境が激変していることが明らかとなった。

Tさんが大学に進学した当時は、パソコンが日本社会に流通し始めたころである。入学当初、Tさんは点字でレポートを書き、それを友人、ボランティアに頼んで墨字（視覚文字）に直してもらっていた。まず、教科書や参考書を点訳・音訳してくれるボランティアを確保するのが一苦労だった。点訳は点字器やタイプライターを用いる手作業が主流で、音訳ではカセットテープが使われていた。文字（視覚）情報にアクセスする上で時間と手間がかかるという意味で、間違いなく視覚障害者は情報障害者だった。

Tさんが大学を卒業するころには学生間にもパソコンが普及し、視覚障害者が墨字を扱うためのソフトウエアも開発されていた。Tさんは点字ワープロソフトを駆使して卒論を自力で書き上げたという。ちなみに、1987年に大学入学した私はTさんと同世代である。1～2年生のころは時々、語学の教科書の点訳が授業に間に合わず「予習できない→予習しなくていい」という不幸にして幸福な状況があったことを懐かしく思い出す。私の中高時代は点字（表音文字）のみで読書していたので、大学生になってパソコンで誤字脱字のない墨字文書を独力で完成させるには、それなりの努力が必要だった（今、この原稿をノートパソコンで入力しながら、機器の進歩と時の流れを実感している）。

Yさんが大学に進学した2000年代には、視覚障害学生が教科書等の点訳で困ることはほとんどなくなっていた。少子化の影響もあり、大学と学生の関係は様変わりした。学生はお客様、大学はサービス提供者という図式が定着し、障害者の修学ニーズに対応するために、各大学に「障害学生支援室」が設置されるようになった。Yさんも、読みたい資料を学内のコーディネーターに渡すと、約束した期日に点訳・音訳データをもらうことができたという。パソコン点訳、デジタル録音が一般化し、墨字と点字の自動変換技術も向上した。Yさんを含む近年の視覚障害学生の間では、点訳・音訳とい

う作業を経ずに、墨字のテキストデータをパソコンで直接音声化する学習法も多用されている。そして、各種電子ファイルは日常的にメールでやり取りされるのである。

私の周りでも携帯電話、スマートフォンの読み上げ機能を使いこなし、電車の時刻表、コンサート日程などを瞬時にチェックして、「見常者」（晴眼者）に提供する視覚障害者の友人がいる。情報化社会は、見常者以上に視覚障害者に大きな恩恵をもたらしたといえるだろう。最近は民博の会議資料の大半も電子データでもらえるようになった。それはありがたいのだが、私はパソコン操作が不得意なので、大量のデータを処理するにはけっこう時間がかかってしまう。いわゆる斜め読み、飛ばし読みができないのが視覚障害者（音声パソコンユーザー）の弱点である。多種多様な会議資料をパソコンの音声で確認しながら、ふと「読めない不自由」と「読まない自由」の微妙な関係について考える。視覚障害者の「読めない不自由」は解消すべきだが、同時に「読まない自由」も保障されなければなるまい。

情報化では解決できない課題

情報化の恩恵を一言で要約すると、「視覚障害者がハンディキャップを感じることなく、見常者と同じ条件で学習できる環境整備」となるだろう。私自身の大学進学、博士号取得、民博への就職なども、情報化の恩恵により具体化した成果、まさに「完全参加と平等」の達成といえる。しかし、私は「同じ条件」「平等」という言説に多少の違和感を抱くのである。たとえば、博物館において視覚障害者は展示物を見ることができない。だから「同じ条件」を整えるために音声ガイドを用意しよう、解説文を点訳しようという発想は、バリアフリーの試みとして評価できる。ただし、「見る」ことを大前提としているかぎり、ユニバーサルな展示が実現しないのも事実であろう。同じことは高等教育のバリアフリー（障壁除去）とユニバーサル化（パラダイム変換）の関係にも当てはまる。ここでは大学教育のユニバーサル化をめざす一助として、入学試験のあり方に注目することにしよう。

一般に日本の大学を点字受験する場合、1.5 倍の時間延長が認められている。1979 年、共通一次試験のスタートに伴い、点字出題・解答が公認される。これ以降、1.5 倍ルールは大多数の大学入試、および公務員・教員採用試験に適用されていく。点字受験生は、文字を読み取ること、あるいは指示された下線部などを探し出すことに見常者以上の時間を要する。幅広く全体を見渡すことができる視覚と、部分を指先でたどる触覚にはおのずと差が生じる。しかし、点字に習熟すれば見常者とほぼ同程度のスピードで文字を書くことができるし、頭で「考える」時間は視覚障害の有無に左右されないはずである。問題の性質を度外視して、一律に試験時間を 1.5 倍にすることが、はたして「同じ条件」といえるのだろうか。私の大学受験体験を振り返ってみても、センター試験の国語など、長文の読解が不可欠な試験では、1.5 倍の時間があっても不十分だった。他方、二次試験の数学や小論文など、「考える」時間が長い試験については、1.5 倍の延長は有利だったのかもしれないと感じる。

大学入試センターでは、点字使用者の触読スピードに関する調査を積み重ね、1.5 倍の時間延長を決めている。受験生の体力的負担、1 日で複数科目の試験を終える日程的制約に配慮すれば、1.5 倍はぎりぎりの延長幅、妥当なバリアフリー施策といえよう。だが、博物館展示のケースと同様に、「見る試験」を大前提としていては、入試のユニバーサル化は理想のままで終わってしまう。見常者と視覚障害者が対等な条件で「考える」ことができる試験とはどんなものなのか。「見る試験」と「さわる試験」が共存する可能性はどこにあるのか。引き続き議論していきたい。

「さわる展示」の導入が視覚偏重の常識に再検討を迫るように、高等教育のユニバーサル化を指向するなら、大学の講義の形式を根底から問い直すことが求められる。見聞（視覚と聴覚）に基づく近代的な学問体系に対し、「感覚の多様性」を掲げて異議申し立てをするのが“手学問”である。すでに触文化を探究する壮大な実験は、大学教育の現場（一部の理系分野）でも始まっている。とはいえ、“手学問”に立脚する授業を一から組み立てるのは容易な作業でない。高等教育全体を改変していくには、まず入試のユニバーサル化に取り組むのが当面の課題となろう。私たちの研究会がそのための何らかのきっかけとなるような提案ができれば嬉しい。



研究会参加者が共同制作した「感じる手＝手学問の塔」（2013 年 3 月 2 日、国際基督教大学博物館、鈴木康二撮影）。

ひろせ こうじろう

1967 年生まれ。13 歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。専門は日本宗教史、障害者文化論。視覚に頼らない知的探究の技法として、“手学問”を提唱。主な著書に『さわる文化への招待』（世界思想社 2009 年）、『さわっておどろく！』（岩波ジュニア新書 2012 年）などがある。